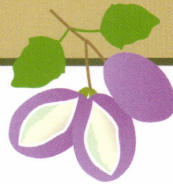


# 患話休題

かんわきゅうだい

41



院長  
真崎 雅和

## 最近の滲出性中耳炎の考え方

しんしゅつせいいちゅうじえん

滲出性中耳炎は中耳(鼓膜の奥)に水がたまって抜けないう状態で、小児の難聴(こまぐ)の最も多い原因です。ただし熱もなければ痛くもないので見逃されている場合も多いようです。実際診察中に偶然発見し、「お子さんの聞こえが悪いと感じたことはありませんか？」と尋ねると、「後ろから呼んでも返事をしないことがあったが、熱中しているせいだと思った」と答えられる保護者の方も少なからず経験します。

滲出性中耳炎は急性の中耳炎(痛、発赤する、膿がたまると、耳漏がある)を契機とし、その後遺症として起こる場合と、知らないうちにかかっている場合がありま。いずれも滲出液や中耳に細菌が存在することがわかっています。最近ではこれらの細菌がバイオフィルムというバリアを形成して、人体の免疫応答(自然治癒力)を回避し、また抗生物質が届かないようにしてひそかに生き延びていることが原因の一つといわれています。もちろん子供の全てがかかるわけではないので、遺伝子的要因や環境要因、構造的要因も関与しています。

滲出性中耳炎は、幼児の大部分が一度は発症するとみられますが、その6割は3カ月以内に自然に消退するといわれています。逆に3カ月以上滲出液が残留すると慢性化し、以降年余にわたって持続するといわれています。慢性化すると滲出液は膠状になり聞こえにかなりの影響が出るため、言語獲得や情操教育に支障が出ることを考えられます。また中耳の周り

に発育する乳突蜂巣(ちゅうぶそう)という小さな骨の空洞の集まりが詰まって、中耳の換気がうまくは働かなくなり、将来的には手術が必要な慢性中耳炎に移行することもあります。

以前は早めに鼓膜を切開し、排液するのが常套手段でしたが、何度も切開するうちに鼓膜が弱くなったり、子供が恐怖を感じて治療に協力しにくくなったり、加えて慢性化する例は切開排液しても効果が一時的であることがわかってきました。そこで、最近ではまず3カ月経過を見て、治癒しない場合は換気のための管(鼓膜チューブ)を挿入するという治療のガイドラインが示されました。ただし、すでに聞こえが相当に低下している場合や鼓膜・中耳が変形し慢性化している場合には、経過を待たずチューブを入れることもあります。チューブは数カ月以上入れておきます。大部分はこれで治癒します。

お子様と接して、聞こえが悪いのではないかと感じた場合は、そのうち成長すれば治るだろうと思わないでください。ウイルス感染や突発性難聴は早期に治療しなければ治りませんし、滲出性中耳炎では3カ月以上経つとチューブを入れる以外に治らなくなります。時々後ろから小声で名前を呼んでみてください。お子様は、振り向きませんか？



急患 随時受付

診療時間	月	火	水	木	金	土	日祝
午前 8:30~12:00	○	○	○	○	○	○	休診
午後 3:00~6:30	○	○	○	休診	○	△ 3:00~4:00	休診

診察時間が近づいたことをお知らせする  
メールサービス  
約30分前  
ご利用ください。  
ご希望の方はメルアドを受付へ!!